



# 日本橋の 建築 装飾

五十嵐太郎

## 第18回

## 装飾と構造が共存する 華硝のデザイン

54ページ

写真 江戸切子の店華硝 日本橋店 店内

(ビル設計 三井建築設計事務所)

撮影 遠藤拓哉

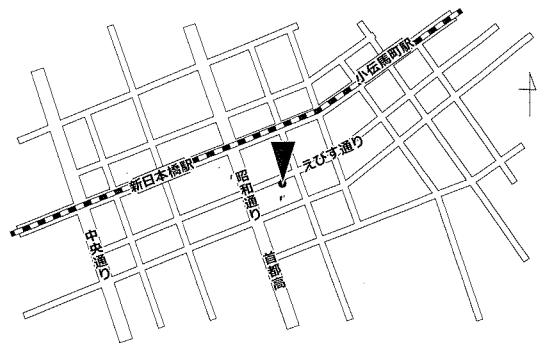
2016年にオープンした日本橋本町の「江戸切子の店華硝 日本橋店」が1階に入るビルはその外観において1928年築の老朽化していた看板建築(旧テラー堀屋)を保存・改修し、内部の空間において新しい時代の装飾が登場している。工事としては建て替えの方が簡単だが、施主の強い思いを受けて、いったんジャッキアップして全体を持ち上げ、土台と基礎をつくりかえ、1階に鋳鉄製の門型フレームを6つ組み込んだ。かくして1階の店舗空間を分断する壁を

入れない耐震補強を可能としたが、ただの門型だと不粋な材となってしまう。そこでコンピュータを活用し、構造解析、重量、コストを調整しつつ、装飾的にも見えるフレームを実現した。角部を視線が抜ける軽やかな網目状としつつ、やわらかなアーチのラインも導く。興味深いのは、幾何学的な網目のパターンが、切子の細かい意匠とも呼応していることだ。

設計を手がけた三井<sup>みつい</sup>嶺<sup>りょう</sup>は、東京大学で日本建築史を研

究した後、世界的に活躍する坂茂の設計事務所勤務した経歴をもつ。彼が茶室にも造詣が深いことと、ユニークな構造のアイデアをもつ建築家のもとにいたことは、旧テラー掘屋改修のプロジェクトと無関係ではないだろう。建築のデザインでは、しばしば構造（一次的なもの）と装飾（二次的なもの）は二項対立的にとらえられている。だが、彼の設計では両者が重なる。つまり、コンピュータによるデザインと歴史的な思考が結びつき、構造的かつ装飾的であるモノとして独特なフレームが誕生した。歴史を重視する日本橋らしさとデジタルの融合は、未来のモデルになるだろう。

文・五十嵐太郎（いがらし・たろう） 東北大学大学院工学研究科教授。建築史・建築批評。第11回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展（2008年）日本館展示コミッションナー、あいちトリエンナーレ2013芸術監督などを歴任。近刊に『建築の東京』（みすず書房）。



華硝は昭和通りからすぐ  
（編集部撮影）